

naoki kono

直木孝次郎が語る

かたりべ草子 九

kojikinonogatari

古事記物語



日文 701691568

かたりべ草子 九

直木孝次郎 *noki kōjirō* が語る

kojikinonogatari

古事記物語



平凡社

直木孝次郎が語る「古事記物語」

一九八四年六月八日 初版第一刷発行

著者 直木孝次郎

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区三番町五番地 〒102

電話 東京(〇三)二六五—〇四五—

振替 東京八二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

定価一、二〇〇円

不良本は、直接読者サービス係でお取り
替えます(送料は小社負担)。

目

次

はじめに……フ

上巻

一 天地のはじめと地底の国——イザナキ、イザナミの物語……17

二 天の岩屋——ウズメノ命のてがら……31

三 八俣の大蛇——スサノオノ命の冒険……43

四 因幡の白うさぎ——苦難と戦うオオクニヌシ……50

五 国ゆずり——三人めはタケミカズチノ神……65

六 高千穂の峰——天くだる神がみ……80

七 海の神の宮殿——海幸、山幸と釣り針……91

中巻

一 戦うイワレビコノ命——苦難の大和平定……109

二 高佐土野の妻どい——イスケヨリ姫の苦心……125

三 はじめて国を治めた天皇——三輪の大神とタケハニヤスヒコ……133

四 サホビコの反乱——サホ姫の涙…… 141

五 白鳥になった皇子——ヤマトタケルの歎き…… 156

六 オキナガタラシ姫の冒険——荒波をのり越えて…… 180

七 宇治川の戦い——天皇の位をめぐって…… 192

八 アメノヒボコと赤い玉の女——新羅からきた王子…… 208

九 イズシオトメと藤の花——約束を破るとどうなるか…… 212

下巻

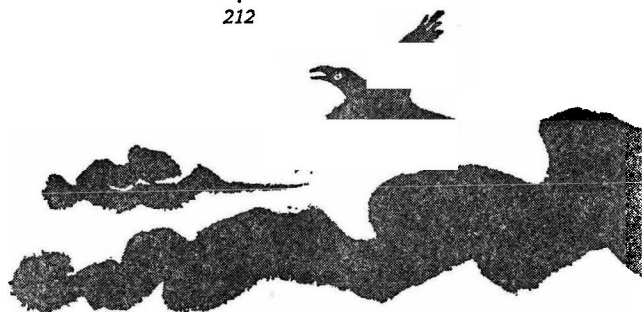
一 イワノ姫の愛と怒り——仁徳天皇と后たち…… 219

二 皇子たちの争い——不意打ちとだまし打ち…… 240

三 流された皇子——兄と妹の愛情…… 248

四 三輪川のおとめ——雄略天皇の約束…… 256

おわりに…… 267



口絵・挿絵 太田大八

装幀 菊地信義

直木孝次郎が語る

古事記物語こじきものがたり

はじめに

読者は因幡いなばの白うさぎの話を知っておられるだろうか。隠岐おきの島からこちらの岸へ渡りたいために、わにぎめをだまし、その罰でじまんの白い毛をはがされたうさぎの物語である。うさぎを助けてやったのは、オオクニヌシというしんせつな神だが、この神は、八十人のいじの悪い兄たちにいじめられ、地の底の国へ逃げてゆく。そこでもたくさんの苦勞を重ねたすえ、スセリ姫びめという美しいおとめと結婚する。そして地上へ帰ってきて、兄たちをこらしめる。

このスセリ姫の父は、スサノオノ命みことといって、出雲いすもの山奥やまおくで八俣またの大蛇おろちという蛇へびを退治したことで有名な神さまである。八俣の大蛇というのは、頭が八つ、尾が八つある怪物で、毎年一度ずつやってきて、娘をひとりずつ食べてゆく。スサノオノ命は、この怪物と闘っ

て斬り殺し、今年食べられる番にあたっていたクシナダ姫ひめというおとめを救い出し、結婚する。

また、読者は、ヤマトタケルノ命という勇ましい皇子の物語を知っておられるにちがいない。この皇子は、はじめ九州の南に住むクマソタケルという兄弟の悪者を、たったひとりで討ちとりに出かける。クマソタケルの警戒が嚴重なので、女の姿に変装してしのびこみ、兄弟の油断しているすきをねらって、刺し殺す。次に東国とうごくの乱暴な者どもを平らげにでかける。野原で火攻めにあつて、焼け死にそうになったり、海の神の怒りのために大あらしがおこり、乗った船が沈みそうになったり、次つぎに危険と戦いながら、はむかう敵を討ち従える。しかし、とうとう帰り道に、美濃みのと近江おうみの境にある伊吹山いぶきやまで、山の神の降らした雹ひょうに打たれて病氣になり、故郷の大和やまとを恋しく思いながら、息が絶える。そして魂は白い鳥になって、空高く飛んでゆく。

また、天皇がお后おきさきにしようと思つていた皇女と結婚したために、殺された皇子の話もある。その皇子は、ハヤブサワケノ王みこという。仁徳天皇はメトリノ王みこという皇女を后にするつもりでいたが、メトリノ王はハヤブサワケノ王がすぎになり、ふたりはこっそり結婚す

る。そして、どうせこのままでは無事にすむまいと、謀反の相談をする。それを察した天皇は、軍隊を集めてふたりを攻める。ふたりは都のあつた難波から逃げてゆくが、大和の宇陀の山の中で追いつかれて殺される、という悲しい物語である。

これらの物語は、これからお話する『古事記』の中の、ほんの一部である。『古事記』は、現在まで伝わっている書物としては、日本で書かれたいちばん古い書物であるが、このような勇ましい話、悲しい話、めずらしい話をたくさん含んでいる。この書物は、その名のように、日本の古い、むかしの事を、書き記したもの——古事記——であって、古くから伝わった物語や、天皇家やそのほか有力な氏族の家に伝わる系図をもとにして、書かれたものである。

『古事記』は上・中・下の三巻からなり、上巻には神代の物語、中、下巻には人の代の物語が書かれている。その巻まきには、強い神さまややさしい皇子、美しい姫や恐ろしい怪物、またうさぎやいのししやねずみなど、たくさん神、人、動物が現れ、さまざまの物語がくりひろげられる。分量にすると、系図の部分より物語の部分のほうが、ずっと多い。しかし『古事記』は、おもしろい話を集めただけの物語集ではない。天地のはじまりや、

日本の国ぐに、島じまのできた由来から説きおこし、アマテラス大御神おおみかみとその子孫の天皇や皇子たちを中心にして、日本の国の発展のあとを述べた歴史の書物である。七世紀のはじめの推古天皇すいこのところまで書いてある。

この日本の歴史であるという点が、『古事記』の特色である。物語は、アマテラス大御神とその子孫の天皇家の発展のあとがよくわかるように、配列されている。それが『古事記』の大すじであり、天皇家の発展の歴史を明らかにすることが『古事記』が書かれた大きな目的である。

しかしもちろん、アマテラス大御神が思想上・信仰上の存在で、むかしの天皇の実際に存在した先祖ではないように、『古事記』の物語は歴史の事実ではない。『古事記』をつくるのに関係した人びとは、日本と天皇家の歴史をこのようなものと考えていただろうが、そうだからといって『古事記』の物語にみえるようなことが、実際にあったのではない。当時の人びとにしても、地の底にべつな国があるとか、皇子の魂が白鳥になって飛んだとか、ほんとうに信じていたかどうかは疑問である。この『古事記』の物語が歴史上の事実かどうかという問題から離れて、物語として、文学として、味わってもらうために、わた

くしはこの口語訳をこころみたのである。

『古事記』の著者は、太安麻呂おのやすまろと伝えられている。『古事記』には、『古事記』ができあがるまでの事情を書いた序文がついているが、それによると、この書物をつくることを思いついたのは、天武天皇である。この天皇は六七三年から六八六年まで位にあったが、生きている間にはできあがらず、天皇の死後、二、三十年の歳月が流れた。そして奈良時代のはじめの七一二（和銅五）年正月二十八日、太安麻呂が、天武天皇のもとで古い書物を誦よみ習った稗田阿礼ひえだのあれの助けを借りて『古事記』を完成させ、元明天皇げんめいにたてまつった、というのである。

安麻呂の年齢はよくわからないが、このとき正五位上しょうごいのじょうという地位で、約十年後の七二三（養老七）年に従四位下じゆしいのげで死んでいる。当時の上流階級に属する人だが、官吏としては中の上くらいうへの身分である。『古事記』を書いたときは、四十歳前後であろう。

安麻呂の位や、いつ死んだかは、『古事記』の序文と、『続日本紀しよくにほんぎ』という奈良時代の歴史を書いた書物からわかることだが、一九七九年の一月、思いがけないことに、太安麻呂の墓が発見された。

一月二十日のことである。奈良市の市街地から十数キロメートル東の山間部の此瀬^{このせ}というところ、茶畑の手入れをしていた竹西英夫さんが、そのお墓を掘りあてたのである。その墓は、まわりに炭をぎっしり埋めてあったので、はじめ鍬^{くわ}先に炭がひっかかり、ふしぎに思つて炭をとりのぞくと、その下に空洞があり、のぞいてみると空洞の底に白い骨を盛り上げてあった。白い骨は火葬にされた骨である。

それが安麻呂の墓とわかったのは、骨の下から、次のような文字を彫りこんだ銅板が出てきたからである。

左京四条四坊從四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥

年七月六日卒之 養老七年十二月十五日乙巳

はじめの「左京四条四坊」は太安麻呂が生きていたときに住んでいた場所である。次の「從四位下勲五等」は安麻呂の位階、その次に「太朝臣安萬侶」とあるのは、いうまでもなくこの墓に葬られている人の氏と姓^{かばね}と名である。安麻呂は「安萬侶」とも書くのである。「朝臣^{あそみ}」は安麻呂の身分を示す称号で、姓という。「癸亥^{みずのといのとし}年」は七二三年に相当し、養老七年というのと同じである。「卒^{しゅつす}之」は「みまかる」と読んでもよい。死ぬことを意味する。

このように死んだ人のことを記して墓に入れる品のことを墓誌という。

太安麻呂が七二三年に死んだことは『続日本紀』によってわかっていたことだが、その墓が発見されようとは、だれも思ってもみなかったことである。しかも墓誌がいっしょに出土し、骨までが残っていたのである。一月二十三日から二十四日にかけて、太安麻呂の墓と墓誌発見の知らせはビッグ・ニュースとして、日本のすみずみにまでひろがった。

わたくしは、ちょうどこの『古事記』の現代語訳に着手していたときでもあったので、感銘はひとしおのものがあつた。今まで遠いむかしの人と思っていた安麻呂が、急に身近に感じられた。

それから三か月あまりたって、ようやくこの本の最初の原稿を書きあげた。親子、兄弟などの複雑な系譜の部分を除いて、物語はできるだけ忠実に現代語に訳したつもりである。ただし、分量の関係から、下巻は約半分ほどの物語を省いた。お許しを願いたい。なお原文の敬語の表現は、「御刀」を「刀」とするように、ある程度簡略にしたことを、おことわりしておく。

物語の中に出てくる歌は、いちおう訳しておいたが、やはりもとの歌を読んで、あじわ

ってもらったほうがよいと思う。それで、もとの歌を上にかかげ、わたくしの訳を並べて記しておいた。対照して読んでいただきたい。

それでは、前口上はこのくらいにして、本文にとりかかっていただこう。